

# 対人恐怖心性と養育体験の関係性について

大久保 純一郎<sup>1)</sup>

“対人恐怖”は対人場面において強い不安と緊張を生じ、他者からへんに思われることを恐れ、対人関係を回避する傾向を持つ（永井，1994）。従来は、日本特有の“神経症”の一種とされていたが、近年DSM-IVなどにおける社会恐怖との関係が強いことなどから注目を集めるようになって来た。その成因については、従来から研究が続けられてきたが、養育経験や親子関係についても多くの研究がなされている。山下（1977）は、対人恐怖症者の家庭環境について、全体として“愛情深く”，同時に一応きちんとした“しつけ”が保たれた家庭という印象があると述べている。朝倉（2004）は社会恐怖患者の人格特性と養育環境との関係を検討した。社会恐怖評価尺度LSAS日本語版を用い健常成人群と社会恐怖群に分け比較を行ったところ、社会恐怖群の人は両親の養護が低いことが示された。

朝倉と山下の研究結果は、一見相反するものである。その相違の要因として、時代背景の相違をあげることもできる。さらに、対象者の障害の質の違いをあげることができる。山下の研究における対象者が対人恐怖症の中でも古典的な“確信型対人恐怖症”であるのに対し、朝倉の場合は基本的に社会恐怖が中心であった。山下（2009）によると、対人恐怖症は日本の社会的背景に関係の深い視線恐怖、体臭恐怖などを中心とした“確信型対人恐怖”と、DSM-IVにおける社会恐怖に相当する“緊張型対人恐怖”の2種に分けることが出来る。したがって、山下（1977）の研究対象は主に前者で、朝倉（2004）の研究対象は主に後者であると考えられた。したがって、同じように対人恐怖症といっても、質的に異なる問題があり、養育環境の影響も大きく異なるものと考えられる。しかしながら、山下と朝倉の研究では、対人恐怖症の分類の基準や、養育環境の評価が異なっており、対人恐怖の種類により、養育環境の影響がどのように異なるのかといった疑問に答えることはできない。そこで、本研究では、大学生を対象としたアナログ研究ではあるものの、対人恐怖心性を多元的に捉え、その症状や種類によって、養育経験との関係がどのように異なるのかという点について検討した。さらに、対人恐怖症のメカニズムについても言及した。

対人恐怖にかかわらず、様々な精神的問題が幼少期の家族関係や養育環境の影響を受けることは広く知られているところである。しかしながら、養育の質や程度を評価する方法は十分に確立しているとはいえない。その中で、被検査者が自ら受けた養育体験を回顧的に評価する質問紙として、Parental Bonding Instrument（PBI：Parker, Tupling, & Brown, 1979）が開発された。PBIは、因子分析的に導き出された養育行動の基本構成要素であるケア（care）

と過保護（overprotection）の二次元で評価される。さらに、Parker, Tupling, & Brownは、PBIの2つの尺度の高低を基に親の養育態度を図1に示したように4つに分類した。

本研究では、大学生に対人恐怖心性尺度とPBIを実施し、回顧的に評価された親の養育態度と、現在の対人恐怖心性の関連性について検討する。

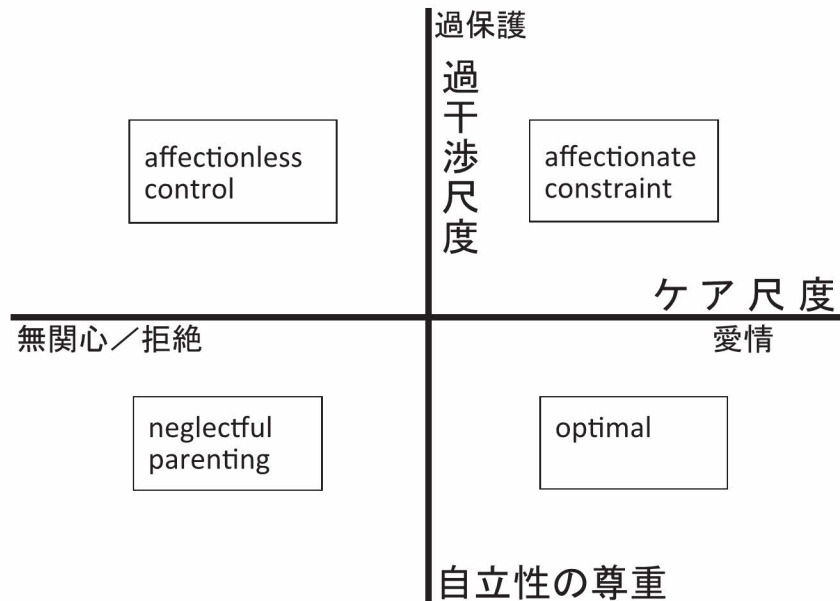


図1. PBIによって得られる親の養育態度（古川，1993を参考に作図）

## 方 法

大学生を対象として、質問紙調査を行った。

### 調査対象者

帝塚山大学において心理学に関する講義を受講している学生を対象に調査を行った。男性80名、女性115名の計195名（平均年齢19.47歳、 $SD=1.53$ ）を分析の対象とした。

### 調査時期

2008年6月末から7月上旬にかけて調査を実施した。

### 質問紙

対人恐怖傾向：堀井・小川（1996）の対人恐怖心性尺度を用いた。この尺度は対人恐怖的な悩みを表す以下のような6種の下位尺度からなる：1）“自分や他人が気になる悩み”，2）

“集団に溶け込めない悩み”，3）“社会的場面で当惑する悩み”，4）“目が気になる悩み”，5）“自分を統制できない悩み”，そして6）“生きることに疲れている悩み”。各下位尺度は5項目からなり，全体で30項目である。“全然当てはまらない（0）”から“非常に当てはまる（6）”の7件法で回答を求める。これら各項目の合計得点が高いほどその悩みが大きいことを示す。

信頼性と妥当性については堀井・小川（1996，1997）が検討結果を報告している。堀井・小川によると，中学生，高校生，大学生を含む932名に関するデータにもとづき，下位尺度ごとに $\alpha$ 係数を求め0.8程度の値が得られた。また，高校生78名を対象とし，10週間の期間をおき再検査を行ったところ信頼性係数は全体尺度で0.94と高い値を示していた。妥当性については大学生をサンプルとして内的崩壊感尺度，自己意識尺度（公的自己意識，私的自己意識）ならびにY-G性格検査との相関を検討したところ，予測どおりの結果が得られ，妥当性も高いものと考えられた。

**親子関係：**Parental Bonding Instrument（PBI：Parker, Tupling, & Brown, 1979）の日本語版（北村，1998）を用いた。この尺度は親子関係の指標を表すもので，16歳以前の幼少期における両親の養育行動をそれぞれの親について回顧的に回答させるものである。ケア（care）と過保護（overprotection）の二次元で評価され，ケア（care）尺度（12項目）と過保護（overprotection）尺度（13項目）の全25項目からなる。“全く該当しない（0）”から“該当する（3）”の4件法で回答を求めた。ケアの得点範囲は0～36点で点数が高いほど親の用語や愛情をたくさん感じており，低いほど無関心または拒絶的であったと感じていることを示す。過保護の得点範囲は0～39点で点数が高いほど親が支配的，干渉的な態度だと感じており，点数が低いほど親が自立性を尊重していたと感じたことを示す。

信頼性については，再試験法でも折半法でも非常に優良な結果が得られている（Paker, 1979）。妥当性については，面接者の評価との併存妥当性が確立されている（Paker, 1979）。また，第3者の直接観察と相関することが確認され，実際の養育態度をも反映していると考えられている（Paker, 1981）。

### 実施手続き

大学における講義時間の一部を用い，質問紙への回答を依頼し，一斉配布，教示，回答，ならびに回収を行った。教示において，質問紙への回答は義務ではない点，回答を拒否し，ないし回答中に中止できること，また回答を行わなかった場合でも，調査対象者に不利益がない点などを口頭で説明した。同じ内容の説明は質問紙のフェイスシートにも記入した。

## 結 果

## Parental Bonding Instrument (PBI) 得点と対人恐怖心性尺度得点

表1に、PBIと対人恐怖心性尺度の得点を性別に示した。本研究結果と先行研究結果の比較を行った。対人恐怖心性尺度については、堀井・小川（1996）の標準化における大学生のノルムを用い、PBIについては古川（1993）の青年期のデータを用いた。平均値の差については、各論文で提示された平均値と標準偏差を用いて  $t$  検定を行った（表1）。対人恐怖心性に関しては、すべての下位尺度において、本研究の対象者の方が標準化群に比べ、対人恐怖的傾向が有意に高いと考えられた。PBIについては、男女とも、父親についても母親についても、ケア得点が有意に低く、過干渉得点が有意に高い傾向を示した。

また、性差に関して統計的検定を行ったところ、“目が気になる悩み”は男性のほうが女性より強いことが見出された（ $t(193)=2.021, p<.05$ ）。その他の下位尺度について有意な性差は見いだされなかった（ $p>.05$ ）。

表1. 対人恐怖症心性尺度とParental Bonding Instrument (PBI) の男女別平均値と性差の検定

尺度	下位尺度	男性(n=80)		ノルムとの差	女性(n=115)		ノルムとの差	性差
		平均	標準偏差		平均	標準偏差		
対人恐怖心性尺度	1. 自分や他人が気になる悩み	17.72	7.04	**	16.45	6.83	**	n.s.
	2. 集団に溶け込めない悩み	15.78	7.90	**	15.39	6.91	**	n.s.
	3. 社会的場面で当惑する悩み	16.93	8.00	**	16.18	7.42	**	n.s.
	4. 目が気になる悩み	14.78	8.30	**	12.44	7.72	**	*
	5. 自分を統制できない悩み	16.06	7.51	**	15.17	6.08	**	n.s.
	6. 生きることに疲れている悩み	15.37	7.31	**	14.22	7.27	**	n.s.
PBI	父親のケア	20.08	7.64		23.08	7.41		**
	父親の過干渉	12.63	5.98		13.00	6.66		n.s.
	母親のケア	25.18	6.05		27.40	6.80		*
	母親の過干渉	13.50	7.04		13.25	6.90		n.s.

n.s., no significant; \*,  $p<.05$ ; \*\*,  $p<.01$

PBIによる養育態度では、女性の方が両親のケア、つまり養護や愛情をより強く感じていることが見出された（父のケア,  $t(190)=2.729, p<.01$ ; 母のケア,  $t(192)=2.336, p<.05$ ）。干渉については、性差は見いだされなかった。

## PBIと対人恐怖心性尺度の関係について

表2にPBIと対人恐怖心性尺度の各下位尺度間の相関係数を示した。男女ともに対人恐怖心性尺度の下位尺度は、相互に有意な相関を示している。PBIの下位尺度得点は、男女で類似したパターンを示している。ケアと過保護得点の間はどの組み合わせも負の相関を示し、ケア間



表 2. 対人恐怖症心性尺度とParental Bonding Instrument (PBI) の各下位尺度間の相関係数 (行列の右上が女性、左下が男性)

尺度	下位尺度	対人恐怖症心性尺度						PBI			
		1.自分や他人が 気になる悩み	2.集団に溶 け込めない 悩み	3.社会的場 面で当惑す る悩み	4.目が気にな る悩み	5.自分を統 制できない 悩み	6.生きるこ とに疲れてい る悩み	父親のケ ア	父親の過 保護	母親のケ ア	母親の過 保護
対人恐怖 心性尺度	1.自分や他人が 気になる悩み		.640**	.611**	.590**	.524**	.493**	-.01	.154	-.158	.141
	2.集団に溶け込 めない悩み	.639**		.716**	.629**	.467**	.500**	-.269**	.162	-.293**	.258**
	3.社会的場面で 当惑する悩み	.760**	.796**		.682**	.549**	.333**	-.231*	.078	-.205*	.176
	4.目が気になる 悩み	.709**	.668**	.764**		.502**	.470**	-.212*	.244**	-.201*	.119
	5.自分を統制で きない悩み	.563**	.442**	.578**	.488**		.578**	-.301**	.229*	-.260**	.167
	6.生きることに 疲れている悩み	.625**	.549**	.531**	.580**	.603**		-.313**	.345**	-.353**	.274**
PBI	父親のケア	-.367**	-.147	-.190	-.259*	-.179	-.308**		-.454**	.385**	-.348**
	父親の過保護	.254*	.186	.170	.260*	.241*	.295**	-.512**		-.462**	.607**
	母親のケア	-.189	-.291**	-.309**	-.252*	-.189	-.249*	.318**	-.508**		-.623**
	母親の過保護	.315**	.342**	.330**	.352**	.127	.228*	-.226*	.504**	-.719**	

\*\*,  $p < .01$ ; \*,  $p < .05$

と過保護得点間はどの組み合わせも正の相関を示した。

次に、PBI得点を説明変数とし、対人恐怖心性尺度の各下位尺度を目標変数にした重回帰分析を行った (表 3)。平均値において、無視し得ない性差が認められたので、男女別に重回帰分析を行った。男性の場合、“自分や他人が気になる悩み”は、父親のケアと負の関係が、母親の過干渉と正の関係がみられ、“集団に溶け込めない悩み”と“目が気になる悩み”は母親の過干渉が正の影響をおよぼしたといえる。全般に、他者を気にする傾向やそのことにより集団に溶け込めない傾向に母親の過干渉が影響を及ぼしているようである。

他方、女性の場合、“集団に溶け込めない悩み”は父親と母親のケアとそれぞれ負の関係にあり、“社会的場面で当惑する悩み”と“自分を統制できない悩み”は父親のケアと負の関係にあった。また、“生きることに疲れている悩み”は、母親のケアと負の関係にあった。女性の場合は、母親のケアが弱いことが対人恐怖心性の表れに影響しているといえよう。

表 3. Parental Bonding Instrument (PBI) の各下位尺度を説明変数とし、対人恐怖症心性尺度の各下位尺度を目的変数とした重回帰分析の結果

説明変数	1. 自分や他人が 気になる悩み		2. 集団に溶け込めない 悩み		3. 社会的場面で 当惑する悩み	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
父親のケア	-.352 **	.095 n.s.	-.076 n.s.	-.199 *	-.141 n.s.	-.225 **
父親の過保護	-.024 n.s.	.104 n.s.	-.038 n.s.	-.130 n.s.	-.096 n.s.	-.160 n.s.
母親のケア	.184 n.s.	-.131 n.s.	-.079 n.s.	-.232 *	-.132 n.s.	-.125 n.s.
母親の過保護	.380 **	.004 n.s.	.288 *	.172 n.s.	.251 n.s.	.119 n.s.
決定係数	.208 **	.043 n.s.	.125 *	.149 *	.134 *	.090 n.s.

説明変数	4. 目が気になる悩み		5. 自分を統制できない 悩み		6. 生きることに疲れて いる悩み	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
父親のケア	-.191 n.s.	-.123 n.s.	-.063 n.s.	-.232 **	-.210 n.s.	-.157 n.s.
父親の過保護	.023 n.s.	.213 n.s.	.178 n.s.	.068 n.s.	.115 n.s.	.193 n.s.
母親のケア	.071 n.s.	-.141 n.s.	-.129 n.s.	-.189 n.s.	-.074 n.s.	-.230 **
母親の過保護	.348 **	-.158 n.s.	-.070 n.s.	-.053 n.s.	.069 n.s.	-.044 n.s.
決定係数	.160 *	.092 n.s.	.070 n.s.	.132 *	.133 *	.186 **

n.s., no significant; \*,  $p < .05$ ; \*\*,  $p < .01$

## 考 察

### 対象大学生の対人恐怖心性と養育体験について

本研究における対象者の尺度得点を、先行研究における結果と比較した。これらの先行研究結果が、現代の大学生の得点の比較対象として適切であるかどうか判断が困難であるが、本研究の対象者は対人恐怖心性が有意に高く、ケアの少ない、過保護の強い養育体験、つまり“affectionless control”の傾向が強いといえる。この傾向は、本研究の対象者についてのみいえるのか、現代の大学生の共通傾向であるのかは、今後のより広範囲の研究が望まれる。

対人恐怖心性の性差は、“視線恐怖”に関する尺度で男性の方が高い傾向が見られたが、他の因子では性差はみられなかった。対人恐怖症傾向は、一般的に男性の方が強いとされているが、本研究では“視線恐怖”に関してのみその傾向が見られた。この傾向は、堀井・小川(1996)の標準化データにおいてもみられた。したがって、対人恐怖心性の男女差はなくなりつつあると考えられる。

養育経験については、すべての尺度で女性の方が強く感じている。つまり、女性は男性より両親のケアを強く感じており、また過保護傾向も強く感じているといえる。男女ともに、ケアと過保護は負の相関を示した。つまり、ケアを感じているほど過保護は弱いと感じている。また、父のケアを強く感じているものは母のケアも強く感じ、父の過保護を感じているものは母についても同様に感じているといえる。つまり、PBIによって測られた親の養育態度は、“affectionless control”や“optimal bonding”に偏る傾向があり、“affectionate constraint”や“neglectful parenting”に傾く傾向は低いのかもしれない。この点については、より多数のデータを集めることにより確認することが望まれる。

### 対人恐怖心性尺度の各下位尺度について

対人恐怖心性におよぼす養育体験の影響について考察する前に、対人恐怖心性尺度の各下位尺度について検討したい。1) “自分や他人が気になる悩み”は他者からの評価に対する不安であるとともに、“項目13. 自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう”という他者影響型の症状で日本的な“対人恐怖症”ないし“確信型対人恐怖”の典型的な症状でもある。2) “集団に溶け込めない悩み”は、なんらかの問題（おそらく対人恐怖の中心症状）があることによって生じる反応としての社会的参加の問題であり、社会恐怖ないし“緊張型対人恐怖”と“確信型対人恐怖”に共通する社会回避症状とでもいうものである。3) “社会的場面で当惑する悩み”もなんらかの問題があることによって生じる反応としての社会的参加の問題であり、“緊張型対人恐怖”と“確信型対人恐怖”に共通したものである。ただし、社会関係の回避とまでは行かないが、社会的場面での悩みとそこからの消極的な逃避としての症状であると考えられる。4) “目が気になる悩み”は、自他の視線へのとらわれをしめし、

他者影響型の症状につながりやすく、“確信型対人恐怖”に多い症状といえよう。5) “自分を統制できない悩み”について、堀井・小川(1996)は、“非現実的な自己認知より生ずる自己愛的万能感の裏返し表現であると考えられる”と述べているが、項目の内容からすると、無力感の表現とも受け取ることができる。これは、ストレスや抑うつから生ずる“精神的な疲弊反応”と理解できる。最後に、6) “生きることに疲れている悩み”についても抑うつのない精神的な疲弊反応と受け取ることができる。

したがって、対人恐怖心性尺度の各下位尺度は、統計的には6つの互いに独立な尺度といえるが、その意味内容から次の3種に分類することができる

- a) 確信型症状：“自分や他人が気になる悩み”と“目が気になる悩み”からなり、確信型対人恐怖症の特徴を示すものといえる。
- b) 社会回避症状：“集団に溶け込めない悩み”と“社会的場面で当惑する悩み”からなり、社会的関係を回避／逃避する傾向を示す。確信型対人恐怖症や緊張型対人恐怖症に共通する。
- c) 精神的疲弊症状：“自分を統制できない悩み”と“生きることに疲れている悩み”からなり、広く精神的な問題に共通する精神的な疲労感に関するものである。

#### 対人恐怖心性におよぼす養育体験の影響について

男性の対人恐怖心性では、“自分や他人が気になる悩み”と“目が気になる悩み”という確信型症状に対して、母の過保護が有意な影響をおよぼしているといえる。他方、女性の場合では社会回避症状と精神的疲弊症状に対して、両親のケアの欠如が有意な影響をおよぼしているといえる。特に、父親のケアが大きな影響を示している。つまり、父のケアを受けなかったと感じていると社会回避症状や精神的疲弊症状が強くなるといえる。以上の結果から、次の3点が考察される。

1. 両親の影響力について：女性の場合は父親との被養育経験が、男性の場合は母親との被養育経験が、対人恐怖心性を形成するのに重要な役割を果たしているといえる。

2. 症状について：確信型症状が過保護、社会回避症状や精神的疲弊症状がケアの欠如によってより強くなるのではないかと考えられる。この結果は、山下(1977)の研究において確信型対人恐怖症者の家族環境が比較的厚いものであり、朝倉(2004)の研究における社会恐怖傾向のある者の養育体験がケアにかけるとした結果に準ずると言えよう。したがって、対人恐怖(ないし社会恐怖)の症状や種類によって養育態度の影響のあり方が異なると言えよう。

3. 養育態度のパターンについて：うつ病、不安障害においては、全般にケアが少なく過保護が強い“affectionless control”型の養育態度が多いといわれている(古川, 1993)。本研究では、男女でことなるが、親の過保護(主に確信型症状にたいして)や両親のケアの不足(主に社会回避症状や精神的疲弊症状に対して)が重要な役割を果たしているといえる。したがって、対象者全体を見ると、ケアが少なく過保護が強い“affectionless control”型の養育態度によ

り、対人恐怖心性症状全般が重くなると考えられ、従来の研究結果に準ずるものと言えよう。

以上3点について考察されたが、性別によって養育態度の影響パターンが異なるが、本研究の場合、男女に分けると対象者数が十分でなく、交絡要因の検討も十分なものではなかった。したがって、対象者数を増やした上で、より詳しく、系統的な分析を行うことが望まれる。

本研究では対人恐怖症状の評価に対人恐怖心性尺度を用いたが、その他の測度についても検討する必要がある。また、今後、本研究のようなアナログ研究のみではなく、臨床群に対する検討も望まれる。

## 文 献

- 朝倉聡 (2004). 社会恐怖 (社会不安障害) 患者の人格特性, 養育環境および臨床症状評価尺度に関する検討 北海道医誌, **79**, 155-166.
- 堀井俊章・小川康之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, **20**, 55-65.
- 堀井俊章・小川康之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成 (続報) 上智大学心理学年報, **21**, 43-51.
- 古川壽亮 (1993). 日本語版Parental Bonding Instrumentを用いた養育体験と性格傾向と精神症状との連関の研究, 精神医学, **35**, 19-25.
- 北村敏則 (1995). 精神症状測定の理論と実際 第2版 海鳴社
- 永井徹 (1994). 対人恐怖の心理－対人関係の悩みの分析 サイエンス社
- Parker, G. (1979). Parental characteristics in relation to depressive disorders. *British Journal of Psychiatry*, **134**, 138-147.
- Parker, G. (1981). Parental reports of depressives: an investigation of several explanations. *Journal of Affection Disorder*, **3**, 131-140.
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L.B. (1979). A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, **52**, 1-10.
- 山下格 (1977). 対人恐怖 金剛出版
- 山下格 (2009). 対人恐怖と日本の社会 こころの科学, **147**, 14-17.

## 注)

- 1) 謝辞: 本研究は, 吉田麻衣子さんが, 2008年度に帝塚山大学心理福祉学部へ提出した卒業論文の一部を加筆訂正したものです。発表を承諾していただいた吉田さんに感謝の意を表します。



## Relationship between Parenting Style and Anthrophobic Tendency in University Students

Junichiro Okubo

### Abstract

**Objective :** The purpose of the present study is to determine the association of parenting style and Anthrophobic Tendency (AT: or social phobic tendency) in university students.

**Method :** One hundred and ninety-five students were completed a questionnaire comprised of the parental bonding instrument (PBI: Parker, Tupling, & Btown, 1979) and Anthrophobic Tendency Scale (Horii and Ogawa, 1996).

**Results and conclusion :** There were significant gender difference regarding to relationship between AT and parenting style. In male sutudents, maternal overprotection and care related to the AT. In female student, father's care resulted related to the in higher level of AT. On the other hand, analysis about more detailed symptoms revealed that symptoms of convinced type related to overprotection, and symptoms of social avoidance and mental exhaustion (nervous type symptoms) related to care. These findings are consistent with previous studies.